



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十七年十月五日 印刷
昭和二十七年十月十日 発行

(乱丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠 (第十三卷)

定価 三百八十円

送料 五〇円

著作権者 中里 幸作

発行者 中里 幸作

東京都品川区南品川五ノ十三

印刷者 森 高 繁 雄

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行人 株式 彩 光 社

振替 東京 一九三九六七番

富士高速印刷株式会社印行

大
菩
薩
峠

第十三卷

目次

不破の關の卷……………五

大菩薩峠梗概……………梁取三義八

題

裝

口

字

畫

繪

道

橫

伊

重

山

東

信

大

深

教

觀

水

編

纂

梁 寺

取 島

三 柁

義 史

三十三 不破の關の卷

一

經濟學と科學が少しく働いて多く得ることを教へると、人間の慾望はそれに拍車を加へて、遂には最も少しく働らくか、或ひは全く働かないで最も多くをせしめるやうに増長して行かうとするか、最も多くを働らいて最も少なく得ることに満足し、それを樂しんで生きて行くものがあるならば、それは奇特といふよりは馬鹿といふ部類の者に屬すべきものの仕事でせう。

處が、與八の働き振りといふものがそれでした。

この男が、甲州有野村ありのむらの藤原家の普請に参加してから、過失といつては、暴女王の淺して行つた悪女塚を崩したといふことの外には過失が無く、仕事としては、殆んど何人前か計上しきれない程の仕事をしてゐることは、疑ひがありません。

併し、その仕事の多寡たかを計算して、勞銀を拂ひ渡すといふ時になると、與八はゐない、ゐないのではない、姿が見えなくなるのです。この男は自分が何時間働いた上に、自分の持つ勞力は常の人の何倍に當るから、これだけの勞銀を與へられなければならぬといふこと

を主張した例が無いから、與へられる時の元締もとどめの計算は、やつぱり普通一人前の工夫の計算にしかありません。

でも、苦情も不平も出ないのは、當人がその分配の席にゐないからです。それで頭割あたまわりをする役割は當人の主張の無いのに當人に代つて割増わくぞを主張するほどの好意はないから、常人じやうじん足並なみの勞銀が組の者に托して與八に向つて支給されて納まつてしまふのです。

それにしても一人や二人は與八といふ特種人物の力量が拔群はつぐんであつて、仕事振りに影日向かげひなたといふものがないといふ點ぐらゐは認めてやる者があつても宜からうと思はれるが、それすら無いといふのは證據がかくれてしまつてゐるのです。

つまり與八はその非凡な力量を以て、常人の幾倍にも當る仕事をしてゐることは確實なのですが、その仕事は影日向がないといふよりは影ばかりで日向が無い、日向ばかりで影が無いといふやうな仕事ぶりになつてゐるからであります。

彼は山で石材を運び、土を掘り、木の根を起すにせよからが、なるべく離れた處を選び、離れた處の人の面倒がる處に好んで食ひつき、いつの間にかそれを綺麗に整理して置いて、他の人が處分するに最も都合のよいやうにして置いて、人が来る自分には、もう自分

は次なる根仕事こんしごとにひとりコツ／＼いそむといふ仕事ぶりを取つてゐるから、當座とうざの人は與八の仕事の忠實なることは感得するけれども、忠實なる仕事の成績ぶりにはあまり注意を拂はしめられないやうに出来てゐます。たゞ一度、惡女塚を崩した時だけは、非凡な怪力を二三の者に示したけれど、それは當時見てゐた二三の者に限り、それ等の者も與八の怪力よりは寧ろこの塚を築いた暴女王の後日の怒りのほどを怖れて口をつぐんでしまつたほどだから、與八の力量の事も、その邊で立消になつて傳はつてはゐないやうになりました。

たゞ、いつも眼につくことは、與八の背に負ぶつたり、手を曳いたり傍に立たせたり、休ませたりして置く一人の子供の事で、これをよく面倒を見ることの方が、いたく人の心を刺戟しました。

見ると與八彼自身の子供とは思はれないのです。さうかといつて他人の子供をあれほどまでに大事にするのも變なものだとは思はれる、これには何ぞ仔細がありさうだといふ氣はするが、それを聞き咎とがめたり調べ上げたりなぞしようとする者は一人も無く、たゞ、さういふ光景を、さういふ氣持を以て眺めやるばかりの事でありました。

こんなやうな働きぶりで、與八は幾日かを藤原家の改築の工事の爲に働らいてをりましたのです。

二

處がこの與八の經濟學を無視した働きぶりを認めずにはをられないものが、こゝに一人現はれました。

それは誰あらう、藤原家の當主の伊太夫以外の何人でもありません。

伊太夫は、絶えずとはいはないが、思ひ出したやうに工事の見廻りをする。その見廻りの都度に經濟學を無視した一人のデカ物があることを、どうしても認めずにはをられませんでした。

それとなく注意して見てゐると、最も多く働いて最も少なく得ることに甘んじて、さうして分配の時は姿を沒し、曾て不平と不満とを主張したことのないのを伊太夫が漸く認めました。

同時に、このデカ物は、自分の子とも他人の子ともつかない、一人の子供を親切に養つて

ゐることを認めずにはをられません。それはこの工事のうちに、乳呑兒を背負つてエンヤラヤアの地搗ちつきに來てゐるやうな女労働者も相當にないではないが、男の身で子供を連れて來てゐるのは、このデカ物に限つてゐることを認めずにはをられません。經濟學を無視する行爲を認める以前に、このデカ物とさうして癪附さぶつきとの異常な形體が伊太夫の眼をそばだてしめたものでせう。

それ以來、そのつもりで見てゐると、見てゐるほど光り出して來るのが、このデカ物の働はたらきぶりです——この男は經濟學を無視してゐる。分配の法則から飛び離れてゐる。他の何事よりも經濟學を無視してゐるといふことが、伊太夫にとつては不思議であり、驚異であり、無謀であることを感ぜずにはをられないらしい。何となれば、伊太夫の頭は、殆んど全部が經濟學から出立してゐるのです。

自分の家のすべての者が自分に對して反そむき去つてゐるといふこと、その反そむき去つて了つた結果として慘憺さんたんたる家庭爭議が遂にこの度の業火がふくわとなつて、家財人命をも燒き亡なぼさずには置かなくなつた破局はきよくといふものも、伊太夫の頭ではやつぱり原もとはといへば經濟學に根を持つてゐるのだといふことを信ぜずにはをられません。

つまり、すべての禍の根元は、藤原家のこの財産にあるのだといふことは何人よりも、深く伊太夫は觀念してゐるのです。

前妻の子と後妻の子とに蟠^{わだかま}りがあるのも、後妻とお銀様との間が火水のやうになつてゐるのも、本來、この藤原家の財産がさせる業なのだ、何んのかのといふけれど、要するに人間は慾に出立してゐる、慾が無ければ人間がないやうに、財産が無ければ藤原家はないのだ。家庭争議は忌^いはしいとはいひながら、先祖以來藤原家が、この國で並ぶものなきで柄に誇り得るのは、かうしてどんな災難があらうとも、災難は災難として、一度ひ自分^{おれ}の額^{かぶ}を動かしさへすれば、立處に幾千の人も集まり、幾倍の工事も爲し得るといふ力、その力に比例して、權勢名聞が周圍に及ぶといふのも一にこの財産ある故にこそである。

大まかに經濟學とはいつても、伊太夫のは佐藤信淵^{しんげん}や河村隨軒^{ずいけん}あたりから得てゐる經濟學ではなく、わが藤原家の祖先傳來の財産といふものから割り出してゐる經濟學なのですから、この私有財産あつてこそ經濟學で、その私有財産を基礎としないことには、經濟も倫理も、道德も、學問藝術も總てが消失して了ふのです。そこで彼は藤原家の財産を損せぬ程度に於て、またいつか利息を含めて戻つて來るといふ計算の上に於て、慈善のやうなこ

ともやり、贅澤のやうな金使ひもやりました。

自分の威勢といつた處で、兵力を持つてゐるわけではなく、官位を持つてゐるわけでもない、家は古いには古いが、攝家清華といふわけではない、人がつくもつかざるも、要するにこの財産の威力のさせる業なのだ。

伊太夫はそれがよく判つてゐるだけに、人を使ふにも、人の慾を見ることに抜目が無いのです、少なく與へれば怨む、多く與へれば驕る、一時、威壓で抑へて、勞銀以上の働きをさせても、能率や實際から見ると、それはいけない、安ければ安いやうに何處かに仕事が抜いてある、やつぱり人を使ふには少なく與へていかず、多く與へ過ぎていかず、その邊が經濟の上手と下手との分るゝ處だ、——さういふやうな經濟眼は發達してゐるから、少なくとも祖先以來の家産を減らさなければ、忌でも増殖させて行くことは測られない程であります。

この經濟の蔭に家庭のあの暗い影のあるのは望ましいことではないが、止むを得ないことだと腹にこらへてもゐるのです。家庭の暗い影は、もとより望ましいことではないが、この暗い影の爲に藤原家といふものを拋棄することが出来るか、それは藤原の宏大なる資産

といふものがなければ、一家親戚のこれに頼る心と、これを見る眼といふものが消滅してしまふに定まつてゐる。自然、暗い影はそこでサラリと解けるかもしれないが、藤原家といふものが消滅して何の家庭争議だ。肉體を持つ人には病苦といふものがある。病苦を除く爲めに肉體を殺してしまへ、馬鹿なそんな理窟や學問は何處にも無い。

今日しも與八は、おひるの時分、いつものやうに大勢とは離れて、小高みになつた藪蔭の處に竹樋たけひを通した清水を掬ひながら、握飯かきめしを郁太郎にも食べさせ、自分も食べてゐると不意に後ろから人の足音があつて、ガサ／＼と藪の下崩したもえが鳴る。

「あ！ 旦那様」

と振り返つた與八が驚きました。自分の後ろに立つてゐるのは、日頃見知りごしのこの家の主人、伊太夫その人でしたから、

「若い衆、毎日御苦勞だね」

伊太夫が一人足いちしんぞくに向つて、こんな會釋を賜はるほどの事は例外でありました。

「はい、お蔭様で毎日、有難く働かせてもらつてをります」

「お前は本當によく働く」

杖を止めたなりで、伊太夫がちよつとその場を動かうとせぬのも思ひがけないことゝいはなければなりません。

常ならば、番頭や書き役がついて見廻りをなさる筈なのに、今はたれもついてゐないのみか、わざ／＼ひとり、この藪をくゞつて來られた態にも見えるし、與八に向つて、特別に念入りの挨拶をすると共に杖を止めてゐるのは、何かまた特別に與八に話したいことがある爲に、事にかこつけて、人目を避けてこれまで來たものゝやうに見られないでもありません。

そこで、與八も大口を開いて無遠慮に握り飯を頬張ることもなり兼ねてゐると伊太夫が、
「若い衆さん、お前さんは何處から來なすつた」

今度はなほ特別にいねいにさん附であります。與八は答へました。

「はい／＼、惠林寺の和尚様からのお引き合せで御當家様へ御厄介になることになりましたのでございます」

「おゝ、さう／＼忘れてゐた、慢心和尚からの御紹介のはお前さんだつたか」